生命論の実践的諸側面
— 幼児期の死生観形成と保育活動(1) —

A Study on the Practical Aspects in the Theory of Life
— Concept Formation in Infancy on “Life and Death” and Childcare Activities (1) —

三　浦　摩　美*

（平成26年２月12日受理）

要約

人間の死生観・生命観に関する研究を進めるなかで、幼児期におけるそれらの価値形成と保育活動の関わりについて考察の機会を得、日本とドイツの保育施設でのインタビューを通して、生命教育の現状と哲学的人間論の基盤について実地調査を行った。幼児期の生命教育は、自然や自然のなかの動植物との触れ合いを通じて幼児の生活に浸透するように実践される。幼児がどのように死生観を形成させていくかに関しては別の機会での考察に委ねるが、本稿では、モンテッソーリとフレーベルの方法論に基づく幼児教育の実際について調査内容を報告したい。同時に行われた他の保育実践については、以後、順次報告する予定である。

キーワード：生命教育、幼児の自然理解、幼児の死生観（生と死の理解）

keywords： bioeducation, understanding on nature of infants, understanding on life and death of infants

はじめに

本報告は、2012年12月から2013年３月の期間内に日本とドイツの保育園及び幼稚園で実施した、死生観・自然観と保育活動の実践例に関するインタビュー形式による調査内容を基に編集して総論的に紹介するものである。インタビューに応じていただいた幼稚園や保育園には、長い年月をかけて築かれた保育理念や実践の理論と方法論が日々の保育に根付いている。

もちろん、現代的な課題に対応しながらの保育実践であるが、そこには教育活動の創始者達の人間観や教育観が今もなお生きているようすを窺い知ることができる。本論では、保育活動の内容がより具体的に伝わるよう、基本的にはインタビューで報告された活動内容に即してまとめ、理論的背景にとって必要と思われる保育理念や実践活動の歴史に関する事柄を本文中および脚注に加えている。

筆者にとって、死生観ならびに生命観、延いては自然論といった大きな哲学的なテーマは、ここ数年来細々と続けてきた研究テーマであるが、それを人間論や教育論に橋渡しするテーマとなる「幼児期の死生観・生命観の価値形成と保育活動の関わり」は、2012年から２年間の研究費補助を受けて実施した附属総合科学研究所の指定研究プロジェクト（共同）の研究課題との関連から必然的に生じてきた課題でもある。この指定研究では、幼児と保育者の意識調査を行ったが、この保育実践に関する調査報告は、意識調査と保育活動の実際をより全体的・立体的に把握し得るようにすることを目的に、筆者が代表して追加調査を実施したことによる。本稿は、意識調査ならびに本調査の活動報告を附属総合科学研究所に提出した中間報告書に参考資料として付加したものの一部

（＊みうらまみ　保育科准教授　教育哲学・哲学）

である。インタビューを実施した他園の調査内容については、今後分割して発表していきたい。

インタビューでは、①園の教育方針と目的②自然を取り入れた保育活動③生命を生かした保育活動に関する質問項目を中心に聞き取りを行った。

インタビューには、モンテッソーリ「子供の家」の Gelhaar 園長先生とフレーベル幼稚園の Bergmann 園長先生に応じていただいた。

Ⅰ．Montessori-Kinderhaus（Thüringen）

⑴　保育理念について

（統一された保育計画の有無について）

モンテッソーリの「子供の家」では、各園ごとに保育計画を立案できるが、国際的にどこに通っても同じ質の教育ができるよう統一された基準があり、この園もそれを取り入れている。

（モンテッソーリ「子供の家」の教育理念）

①モンテッソーリの教育では、国際的にも統一された教育の質を保つようにする。

②平和教育の重要性；社会、宗教、異文化教育の重要性に鑑み、国際平和の観点から、倫理的に国境を越えた教育を行う。

③知的教育、知的創造力、自由生活、自己活動の展開の支援。年齢に分かれた教材があるが、子供の興味や発達に合わせた子供中心の教育を重視する。

④モンテッソーリの教育の原理に従い、子供の興味や発達に合わせた教材を用い、モンテッソーリの教材以外でも常に新しいものを導入する。

⑤生活のために、多様な経験を持たせる。子供自身を中心に、小さいうちには生活を中心に、そして年齢が進むと算数を取り入れていく、というように興味のあるところから進めていく。

⑥子供の理解に合わせ、障害のある子供、家庭の収入や出生地や生育地に関係なくモンテッソーリの子供の家に入ることができる。

この国の指針もあるが、州、町の指針を合わせ、そしてモンテッソーリの各園の保育計画も含めて、保育内容を決めている。この園では、２歳から６歳の園児が４つのグループに分かれて就園している。子供の家の庭は6,343㎡の広がりがある。

写真１）敷地内の様子

保育時間は、朝６時から夕方５時であり、月曜から金曜の間開かれている。多くの子供達は８時から９時に登園する。朝６時から７時半まで自由遊びの時間になっている。朝食は各自持参する。

保育内容は、モンテッソーリの教材を用いた生活訓練、絵を描く、はさみ、のりを使った造形活動、卵の殻を使った造形物、ちぎり絵、粘土、色水遊び、自然物を用いた遊び、はさみをまだ使えない子供は、針を使って紙に穴を空けた造形遊びをする。

写真２）教具と教具棚

写真３）教具と教具棚

写真４）針描画の展示

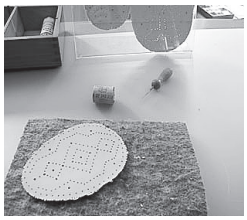

写真５）針描画

１日の保育の流れは、９時半から園庭や森、町に出掛ける。11時に帰園後、昼食を摂る。12時から年少児は昼寝をし、他の子供達は話や音楽を聞き、楽器を用いた遊びや絵を描くなど、自由遊びの時間を過ごす。その後、お昼寝の部屋でお昼寝

する。14時には起きた子供から布団を片付け、着替え、洗顔、整髪後、おやつの時間、15時半から自由遊びや教具を用いた活動を各自決めて行う。この時間で降園する園児もいるが、園で過ごしてもよい。17時まで在園できる。

閉園後、親が来園する機会があり、月１回は保護者対象の説明会を開催している。説明会では、毎回テーマを設定して保育に関する話をする。例えば、２月には「話すこと」をテーマに設定し、教具を用いて保育活動に関する理解を深める機会が設けられている。夏にはパーティーもあり親睦を深め、９月には入園後最初の説明会が開催される。説明会では、１年のテーマが決まっており、各月毎に教具を使った保育活動をする。

また、慣らし保育も取り入れられている。入園当時、半日園で子供達と一緒に過ごすことができる。親達は、１年に１回、必ず担当者と話し合う機会がある。また、入園を検討する家庭には、最初、親だけが園の説明と保育参観に参加する。そして入園後は、園に慣れるまで子供と一緒に登園し、１ヶ月程朝の間一緒に園で過ごすことができる[1]。

イースターやフェスタなどの行事がある。また、特別な教育活動、例えば、英会話の講師による英語の時間やサッカーの時間がある。

⑵　保育活動と自然

年少児は森には行かないが、３歳以上は、火曜日、水曜日、木曜日を１グループずつ、毎週１日必ず森に行く。森は園から300メートル程のところにある。森には様々な木、針葉樹等や小さい湖があり、湖には魚がいる。子供達は、動物他生き物など自然の観察をする。よく見かけるのは鳥が多く、うさぎ、そして稀に鹿の足跡を見ることもある。また、鶴もいる。その他、蛙や虫の観察、湖にいる生き物も手に取って見ることがあるが、見た後は湖に返している。

キノコもあるが、なかには毒キノコがあるので取らないようにしている。ベリー類もそうしている。また、触ってはいけない木もあり、子供達は木の名前や危険なものについて学ぶ。しかしその他は、木の肌触りを触って感じるようにしている[2]。

松傘やドングリは拾っても良い。保育者は、各自自然についての知識を得るようにしている。

森の日で一番大切にすることは、森を大切にすること。森を壊すことのないようにすること、森の保存である。葉っぱや枝、木の実を取るときは下の方から取り、花も摘まないようにしている。そうすると次の人が来てまたその花を見ることができる[3]。

また、森の日にはスープ等の給食を持って行き、森の中で昼食を摂る。昨年、ドイツの幼稚園では森の自然をテーマにした保育活動が行われた。この子供の家でも森に棲む蜜蜂をテーマにした保育活動が行われ、幼児達は蜜蜂を観察し、養蜂家から貰い受けた巣箱を保育室にいながらいつでも自然に目にすることができていた。

写真６）蜜蜂の巣

写真７）蜜蜂が活動する温度

また、保育室の天井には、子供達の描いた温度計が造形作品として紐に吊して飾られている。この温度計には、蜜蜂が森の中で活動できる範囲の温度が記されており、子供達が蜜蜂の観察や生態についての話を聞くなどの学びを持ったことが伝わる。

保育室には、日本でも親しまれている「ぶんぶんぶん」の楽譜がコーナーに置かれており、そばにあるギターの音色とともに蜜蜂を身近に感じながら、蜜蜂の自然の生態と蜂蜜の享受という人間の生活との繋がりについて、体験的に楽しく学んだようすが保育室に居ながら実感できる。

園庭の自然について見ると、リンゴの木があり、それをジュースやケーキに入れて食べている。夏には森にはあまり行かず、園庭でのアクティビティーが主になり、水遊びや石を用意して家を作

り、そこで遊ぶ。夏には休暇を取ることが多く、森へ行くには準備することも多いため、園庭で過ごすことが多い。

前庭ではハーブ類、裏の畑ではにんじんやじゃがいも等を栽培する。ベリー類も生っている。

植物や野菜の栽培は、保育者と子供達が一緒に世話をする。子供達は、収穫したじゃがいもを家に持ち帰ることもできる。園庭には砂場もある。

この園の異年齢混合に分けられたグループ別の保育室には、それぞれにキッチンコーナーが設けられている。

写真８）保育室内のキッチンコーナー

このキッチンコーナーでは、園庭で収穫されたリンゴやにんじん、ハーブ、食べることのできるベリー類の調理を子供達ができるようにしている。ジュースやケーキに加えるなど、食育活動にもなり、身近な自然と自己の生活との関わりを園生活の中で自然の変化と共に感じ取ることができる。そしてそれがまた生活力の育成に繋がっていることが窺える。

ドイツでは、そしてこのチューリンゲンバルトの地域では、古くからハーブ類の採取とそれの生活への活用が盛んであり、現在のアロマによる癒やしや防虫そして医食同源に通じる知識と実用の歴史が、間近にあり親しみのある森との共存のなかで引き継がれてきていることが分かる。

⑶　生命教育について

自然との生活のなかで、植物の生長や枯死、小動物の死に出会う。保育活動のなかで、子供が小動物の死を見かけた場合は、子供達と一緒にそれを片付ける。虫が死んだ場合は死について説明するが、ねずみが死んだときは説明しない。

死を題材にしたお話の読み聞かせや話をする機会は少ない。特別にテーマに取り上げられることはあまりないということであった。

各家庭の宗教について特に把握されているわけではない。子供達は神の存在について話を聞く機会もあるが、詳細に伝えられることはない。

生命教育では、季節のサイクル（四季の移り変わり）の絵が保育室に飾られており、植物の命が種から木に生長し、花が咲いた後実になる。実が熟して落実し、種が再び発芽することでまた新しい木として生長する。このような生命サイクルの話は伝えられている。

写真９）生命サークル造形物

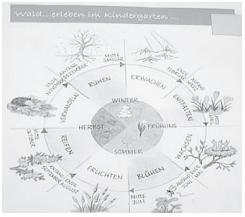

写真10）同ポスター

しかし、詳しく取り上げたりはしない。生命のサイクルが無くなることはない。生命サイクルに触れるときに死の話も出るが、詳しい話はしない。ドイツでは一般的にそうだと思うということであった。

ただし、宗教立の園ではイースター等の機会に死について話すことがある。命についての話や説教は、折りに触れて行われているようである。

上述のように、モンテッソーリの教育の中にも

写真11）３月の植物

写真12）森の動植物

写真左は、この時期の植物（猫柳やクロッカス等）の写真。右の写真は森の動植物を紹介する写真。保育室や廊下のコーナーで見られる。

自然に関する領域がある。子供達は自然について学ぶことで、次第に自然に関する理解を育てていく。

自然や生命について、３歳から４歳児は見たものを学び、５歳から６歳児は、見たもの以外の生物も、同じような生物の生態や生涯があるということを類推し理解することができるようになる。このような発達観が持たれていた。

Ⅱ．Fröbel-Kindergarten（Thüringen）

⑴　保育理念について

自分の性格を出せるように育てること、個性伸長の教育が大切にされている。それには子供の興味やようすを理解することが必要であり、各自の個性に応じた対応が取られている。また､例えば､子供が家庭で起こった問題を絵に描くなどしていると、遊びのなかで声掛けをして対応するということである。

保護者とは毎日小さい相談の機会を持つが、年に１度は、大きな相談について話し合う機会が設けられている。保育者は全てには対応できないが、大きな問題については対応するようにしている。

子供の成長のために一番大切にされていることは、子供に対して愛を感じ、子供に対する尊敬の念を忘れないようにすることである。そして、子供も尊敬の気持ちが分かるようにすることである。子供のことを理解し、子供も他者のことが理解できるようにすること、相互理解の育成が重視されている。人間関係において愛と尊敬、そして理解が重要である。

幼稚園の生活において文章化された保育計画はないが、１日の流れは毎日決まっている。毎日のリズムは、子供達に安心感を持たせることができるからである。

まず、６時から７時30分の間に登園し、自由遊びの時間を過ごす。８時には朝の集まりで挨拶をし、昨日の家庭でのようすを話し合う。その後朝食を摂り、自由遊びをする。自由遊びの後、今日の活動に関する説明を聞き､設定保育が行われる。10時から外遊び。11時過ぎにはお昼ご飯の準備を始める。昼食後午睡の準備をしてお昼寝する。その後、早朝に来た保育者は帰宅するので、子供達の２つのグループが１つになる。午後は自由遊びを行う。17時降園だが、開園閉園時間は家庭の要請による。

子供にとって良いことを考えてプログラムを決めている。早朝からの登園なので、午睡もそれに合わせて時間を決める。早い子供は、11時45分頃には寝ているし、年長児はもう少し遅く寝る。朝食後は集中力が高く、折り紙やリズム遊びなどの活動が行われる。

⑵　恩物について

６つのケースに納められた恩物があり、それぞれ年齢に合った遊びや用い方がある。各自の成長に合わせた遊びについて保育者が説明し、段階を追った用い方や遊びに導く。恩物の時間は毎日ではなく、１週間に１度程度のペースで時間が設けられている。

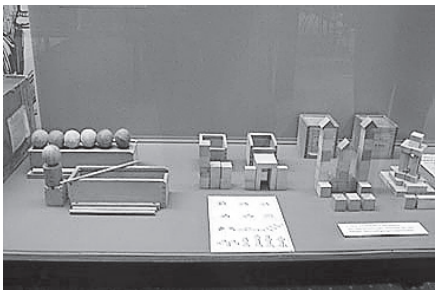

写真13）フレーベル博物館に展示された恩物の一部

恩物はいつも同じ場所に置いてあるので自由に手にして遊ぶことができるが、時間を設定して保育者が説明する時間もある。個人的に説明することもあれば、グループで説明する機会もある。恩物の用い方には様々なレベルがあり、また子供にも各人のレベルがあるのでそれに合わせて説明して用いるように配慮されている。恩物の説明には、ストーリーを加えたり食物等の話を用いて具体的に伝える。例えば、１個のリンゴを２つに分ける、３等分する、４等分する等の話を入れて説明している。具体物や生活の中の物や自然物を

使って説明する。このように、２つのレベルを使って、つまり一度自然の物を使い、次に抽象的数学的な数の操作を使って説明する。子供にもレベルがあるので、それに即して段階的に説明し理解できるようにすることで、１つのレベルから次ぎのレベルへの繋がりが理解できるようになる。

また、恩物には、レーゲンマテリアルのように平面に自然物等の形を再現する遊びがある。

写真14）レーゲンマテリアル

写真15）イースターの飾り

さらに、恩物を用いた遊びでは、子供が諸事物の形態を再構成することで認識の形式、生活の形式、美の形式それぞれにおいて理解を広げることができる。組み立てられた形態には、正解不正解はない。各人の感性によって形が作られていく。保育者が話し掛け、それに応答する仕方で形をつくることもある。例えば、次ぎの夏休みはどこにいきますか、どうやってそこへ行きますか、どのような電車ですか、飛行機で行きますか、なぜ飛行機でいきますか等々声掛けをし、例えば電車ならば電車の形を作り、どうしてそのような形の電車になったのか等と問い掛けることで、今度は逆に、子供がそれに言葉で答えようとする。言葉の使用に導くが、それには子供の生活経験も必要になる。保育者が発問内容や恩物の操作やメソッドを考えて声掛けすることで、子供によって形態が作られていくようにする。

自然や生命にはさまざまな形や美しさがある。上手く形にならないこともあるが、子供自身は満足のいくように形にできたと思うことで一つの積み方が完了し、次ぎの活動へと導かれる。

恩物をいつ使うかはその都度決められているが、前述のように、恩物は、普段いつでも取り出して使えるようになっている。形態の認識に関しては恩物の積み方のみでなく、日常の生活のなかで、丸などの形は理解できる。例えばサークルになった時点で子供達は丸の形を理解することができる。また、折り紙では四角などの形が理解できる。フレーベル幼稚園では、毎日の生活のなかで形の認識ができるようになっていることにも意識が向けられている。

さらに、恩物には砂も含まれており、園庭にある年齢に合わせた３つの砂場においても多様な教育的意義が見出されている。

写真16）砂場

写真17）砂場

すなわち、砂を用いた様々な事物の形や枝などを使って物語りを作る構成遊び、水気を含んだ砂の性質を肌で感じて遊ぶ感覚訓練、年少児にやさしくしてあげる等の人間関係、手の動きの練習等、砂場での遊びにおいても沢山の教育的な意図や目的がある。年齢ごとの砂場は厳格に分けられているのではなく、異年齢の子供が行き来するため異年齢児間の交流ができる。小さい砂場は年少児用で、他の砂場とは生け垣の壁で隔てられている。年長児には、そこでは年少児にやさしくすることに注意しなければならないと教えられている[4]。

写真18）年少児用の砂場
奥に見えるのは仕切りとして作られた生け垣。

自然や形態の認識において一番大切なのは、自然の姿やできるだけ本物の事物を見ることである。そして、見た物を自分の好きなように形を真

似て表現することである。形に表すばかりではなく絵に描くこともあるが、それぞれの子供にとって自由に表現されることが大切にされている。

子供は本物の自然の事物を見て、そしてそれの各部分を見てイメージを作り、形に表す。子供達が遊具を使って見た物を形にするときには、それは何か、どうやって繋がるのか、花なら葉っぱや茎もあるのでそれらはどのようになっているか保育者は尋ね、またそれについて説明する。

前述のように、言語を使って説明することも大切である。例えば、第一恩物ではそれぞれの色を伝える。バラやチューリップに見立てて花の色や形を伝えたり、その色や形で他のものに共通する色や形を類推し関連づけることで言語理解や色、形態の理解に導くようにする。また、聞いて理解するだけでなく、言葉の使用に導くことが大切である。

言語の使用、自然、人間関係は、フレーベル幼稚園の教育にとって重要である。

参観の日の午前中、5歳児クラスでは自由遊び、レーゲンマテリアル、折り紙による造形活動、音楽とダンスが行われていた。

写真19）マテリアル

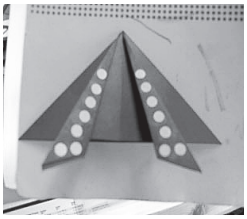

写真20）蝶の折り紙

保育者による折り紙の説明の後、子供達も自然な仕方で折り方を理解し各自言葉でも理解して折ることができるようにする。折り紙による蝶の造形遊びは2回目なので、比較的スムーズに作ることができていたということである。

保育室のドアには、あらかじめ花の咲いた木の造形物が貼り付けられていて、そこに子供達の作った蝶が表情豊かに飛び交った。

写真21）造形物の展示

(3)　フレーベルデンクマールについて

バートブランケンブルクの小高い丘にはフレーベルのメモリアルが置かれている。そのフレーベルデンクマールを構成している四角柱、円柱、球では、各々の形体が持つ特性から自然の秩序を汲み取ることができる。四角柱は動かない。球は動くが、円柱は寝かすと動くが立てると動かない。円柱は、四角柱と球を繋ぐことができる等々。例えば子供達は、恩物にも含まれるこれらの形体の積み木を使って遊ぶことで、幾何学的知識や数学的な考え方を自然に経験して学ぶ。球を例にするなら、球は地球の形でもあり、地球のことを考えさせる機会にもなると考えられている。そして、これらの形はどこにでも、家の中でも自然の中にもある[(5)]。

写真22）デンクマール

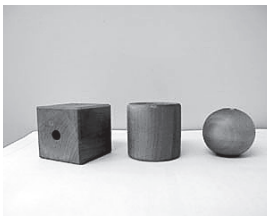

写真23）デンクマール

このような恩物で1歳或いは2歳から遊んでいる。いろんな遊びに広げることができる。

インタビューの時に通された部屋に飾られていたデンクマールは、幼稚園から車で20分程のところにある小さな村でフレーベルの記念に作って貰ったものだそうである。旧東ドイツ地域では、木製玩具の産地が各所にあるようである。

⑷　保育活動と自然について

自然は大切なので、また、自然の変化は目に見えるということで、年間の季節の移り変わりのものが子供達に与えられるよう工夫されている。3月にはイースターを迎えるので、イースターのうさぎが飾られる。また、鳥の卵を隠し子供達がそれを探し出すという活動が準備されていた。

春の日には春の内容の保育活動が準備されるが、この時期はまだ寒さが残っている。訪問時は室内で春を題材にした造形遊びが行われていた。春になってもう少し暖かくなると新しい命が到来すること、生命の話が準備されていた。

フレーベルは、子供達を庭にある植物のように育てる意味で、幼稚園をキンダーガルテンと名付けたことは周知の通りである。植物の栽培では必要に応じて水などをやり、虫がいると取り除き、良い環境で育てるようにする。そのことを子供達に直接話すことはないが、例えば、果物の実から新しい植物が芽吹くようすについては、子供達が直接観察できるようにしている。しかし、それについて説明することはない。この時期、園庭には、例えば、待雪草（Schneeglöckchen）、クロッカス（Krokus）等の小さい草花、栃（Kastanie）、桜（Kirschbaum）の芽やサクランボ（Obstbaum）、猫柳（Weidenkätzchen）等を見ることができる。

園庭や園の花壇では、草花が自然の野にあるように咲いている。花壇では植物の種が蒔かれる。野菜やハーブ類は子供達によって育てられ、食べられることもある。

写真28）園庭に造られた小道と小さな花壇

写真左側に造られた小道には、平らでなめらかな石や園庭で採れたカスタニアの実が敷き詰められてある。夏場には、子供達が駆け回る姿も見られるのであろうか。

また、写真右側にはハーブ類の植物を栽培するための花壇が設置されている。これから種蒔きの季節を迎える。

写真24）イースター兎の飾り

写真25）雪待草の花

この時期に咲く雪待草の花が、訪問した各園園庭の随所に見られる。

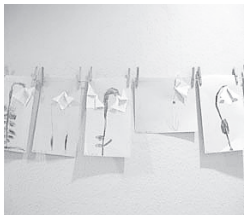

写真26）雪待草の貼り絵

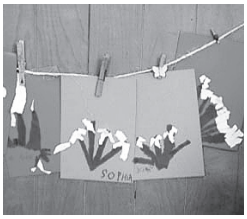

写真27）雪待草の貼り絵

保育室内に飾られた子供達による「雪待草」の貼り絵。

また、園舎から園庭への出入り口の前にある木には、小鳥の巣箱が設置されてある。巣箱は、鳥や小動物に餌をやる場所になっており、餌を置くことで小鳥が飛来し、子供達は鳥の様子を観察できる。

写真29）小鳥の巣箱

昨年は自然がテーマだったので、麦が育つサイクルの説明をし、今年は麦の種を蒔いて育てる経験をさせる計画を用意している。麦の成長のメカ

ニズムについて説明はしないが、体験させるようにする。種や成長過程を見せたり、朝食で収穫できた小麦を調理して食べて味見をする。そういうプロジェクトがある。

また、園庭にはカスタニアの木（栃の木）が沢山あるので、その実を使ってハリネズミ他の動物や様々なものを作る。余ったら森の世話人に持って行き､動物達にあげて食べるようすを観察する。森にはイノシシや鹿がいる。直接姿を見かけることはないが、食べた後をみつけることができる。イノシシは栃の実を食べるが、人はイノシシの肉を食べる。栃の実はイノシシを捕獲するための餌にもなるので森の世話人に持って行く。しかし、子供達にそれを伝えることはない。森は、園から徒歩10分から15分のところにある。

森には勉強するためでなく、自然観察や遊ぶために行く。行ったときに蟻やきのこを見かけるとその説明をすることもあるが、勉強を目的に森に行くのではない。

しかし、森に出掛けるときは毎回違う目的を持っていく。冬の雪道では動物の足跡を追ってみたり、数学的な目的では、木の高さを身長に対比させて感じたり、木や幹の太さを感じたりしている。子供自身が森での自由遊びのなかで、自分も自然の一部だと感じることができるようにするのも目的の１つである[(6)]。

⑸　死生観の育成について

草花の生育、野菜の栽培を通じた自然の力の理解について、森の自然にあるものや園庭にあるものを見て保育活動に取り上げる。訪問時には蝶の製作活動が行われたが、その後、実際の蝶を園庭で観察する予定であったという。しかし、当日はまだ園庭に雪が残り、それができなかった。

さらに、例えば、村で牛の赤ちゃんが誕生したと聞くと子供達と見学に出掛け、学ぶ機会を持っている。見学後には話し合い、物語を作り、その後また話し合う。

子牛の誕生や森や園庭の動植物を通した生命の理解について、子供達は自然の状況を見て理解するが、まだ十分な理解は難しいようである。年長児は、子牛の生命を通じて漠然と人間の生命と関連づけることはできても、ハッキリと理解することは難しい。

また、人体の絵が描かれた本や、お墓について書かれた本を持ってきて話す子供もいる。人間の一生ではそのようなことが起こることを年長児は理解できており、例えば家で誰かを亡くした経験のある子供は、それを思い出して話す姿が見られる。

生の終わり、死について完全にそして最後まで理解できているようには思われないが、家族やペットの死に出会うと死の話になる。キリスト教の影響もあり、家庭では天国の話になることもある。幼稚園では友達同士で死について話すこともあるようだが、保育者はそれについて話はせず、家庭からその話を聞くこともある。

幼稚園に通う子供達の家庭には、カトリックやプロテスタントの信者、またキリスト教でない人もいて、全員がキリスト教徒であるということはない。

フレーベルはもともとキリスト教徒だが、現在の幼稚園はキリスト教の教会立ではない。昨年、教会からクリスマスの招待があり、それに参加した家庭もある。各家庭や個人の考えや宗教観があるので、フレーベル幼稚園では特定の考え方を伝えることはない。

保育者にもそれぞれの考えがある。自然な考え方で、ペットが亡くなると土の中に埋めるが、そのペットに子供がいたら、そのペットの命の繋がりという意味ではまだ生きていると考える。また、人間が亡くなっても、その人のことを覚えている人がいれば、その人の魂はまだ生きていると考えており、そのように伝えることもある。しかしこれは、個人の考えであり、他の保育者や園ではまた別の答えもあり得る。キリスト教では、死後も天国で再会できるし、地上では生きている人の心の中に生きていると考えられることが一般的であると考えられている。

脚注

1）ドイツでは、州の独自性を生かした多様な保育制度や政策、施策が実施されているが、それには多様な経歴や資格を持つ保育者や親の保育運営への参加の機会が多いのも特徴的である。これには、園の運営に対する保護者参加の原則が背景にあると言える。

2）ドイツの主要な樹種は、広葉樹がブナ（Fagus sylvatica L)、ミズナラ、カエデ（Acer platanoides)、サクラ、タモ等、針葉樹がモミ（Abies alba Mill)、トウヒ、ダグラスファ、アカマツ等、約40種類程度である。（岸修司著『ドイツ林業と日本の森林』築地書館、2012年 p.11）

3）森には国土、水源、気候等の保全や保護、温暖化 の抑制などの機能があり、また、自然災害から河川流域を守り飲用水の品質を保つ役割のあることは周知のこととなっている。

ドイツの森は、約36万㎢ある国土のおよそ３割を占めており、幼稚園のあるドイツ中心部に位置するチューリンゲン州には、「チューリンゲンバルト」と呼ばれる標高1,000メートル近い山地が広がっている。

ドイツの森は、民族大移動による人口の増加とそれによる住居の建造や畑地の開墾によって500年頃から1300年にかけて姿を変化させてきた。（カール・ハーゼル著、山縣光晶訳『森が語るドイツの歴史』築地書館、1996年 p.46）

特に、1100年から始まった大開墾期を通して多くの集落が誕生し計画的に区画された「地条型耕地」が現れ（同書 p.49)、1300年頃には、今日のドイツの森、農地、市街地などの風景を形成させたという。しかし、三十年戦争による戦禍の影響で森林が荒廃したことから保護が進み、木材の確保と樹脂の採取、炭焼き業が行われるようになった。そして、18世紀には、未踏の森への入植地でガラス製造が行われたことで、チューリンゲンバルトの地にも小さな村ができた。（フレーベルの生家のあるオーバーヴァイスバッハもガラスの産地である。）

ガラスの製造やリューネブルクの岩塩抗では多くの木材が必要とされ、さらに田園地帯のさらなる人口増加によって森林が伐採され、歴史的、地域的に森林の絶滅を招く事態も発生したが、広葉樹や針葉樹の植栽により森林の保護や造林が行われてきた。（同書 p.64）

もともとチューリンゲン地方は広葉樹であるブナ林が75% を占めていたが、現在は針葉樹である唐檜（トウヒ）が増加しているという。（同書 p.132）

以上のように、森は国土や環境の保全ばかりではなく、生活、産業、文化と共に形成されてきたことが分かる。

現在、森を守る仕組みは、連邦森林庁、各州森林庁、民間林業事業体によって構築されていて、具体的な運営は各州や事業体に委ねられている。（岸修司著、前掲同書 p.30）

この仕組みのもとに森の保全を担っているのが、ドイツ連邦森林法や州の森林法、そして、フォレストと呼ばれる森林官や技師である。特に、高級森林官や上級森林官は、森林環境や生態系保護、そして「森林教育」の役割を担っていて、子供を対象とした森の生き物の観察や鳥の営巣、森の中での遊び、渓流での水車づくり

写真30）3月のチューリンゲン州の森林　写真31）同左

写真32）丘陵地の畑地　写真33）丘陵地の畑地

写真左には、上方に区画化された畑地とその右側に集落の一部が見える。

や青少年向けや成人用にもプログラムを準備している。（同書 pp.57-58）

市民は植林地や伐採作業現場以外は自由に森林に入ることができるが、立ち入りや通行、キノコや果実、花や雑草は手で持てる束程度の量まで、個人の必要に応じて摘むことができる（ラインラント・パルツ州森林法（「第23条　森林産品の占有」）という規定もある。（同書 pp.43-44）

4）1840年創設当時のフレーベル幼稚園には砂場がなかったという指摘がある。（笠間浩幸著『＜砂場＞と子ども』東洋館出版社、2002年第２刷 p.107）そこには、純粋な遊び場である「砂場」以上の教育的な意義を、子供達の庭に求めていたからではないかという指摘である。確かに、次ぎのような指摘には頷くことができる。

「彼の幼稚園の理念は、キンダー（子共）のためのガルテン（庭・菜園）にあったのです。つまり、そこでは幼児が自らの手で土に触り、種をまき、草花や野菜を育て、花を愛で、収穫するという一連の作業が大変重要な教育活動として基本に据えられていました。そんなフレーベルにとっては、屋外においての土いじりの作業、つまり畑での作業こそが重要な活動であり、それは砂遊びの要素をも内に含みながら、しかし、それをはるかに越える意味をもつものとしてとらえていたのかもしれません。

子供達は、畑を耕し、穴を掘りながら、時には砂山ならぬ土山をつくって遊ぶこともあったでしょう。フレーベルにとってはもはやそのことで十分であり、＜砂場＞のような場所での純粋な遊びの要素よりも、むしろ畑作業という仕事の中に潜む遊びの要素を彼は大切にしたのではないでしょうか。」（同書 p.109）

写真34）幼稚園の模型図

写真35）創設時のクラインガルテン

フレーベル博物館に展示された創設時のキンダーガルテンの模型と絵。現在は博物館としてフレーベルの生涯と功績、恩物などが展示されている。毎年、日本からも多くの保育者養成機関からの来館者を迎えている。写真は、引用著書中にも収められているが（pp.107-108）、フレーベルの菜園がテーマになるときには折に触れて用いられている。本稿においてもクラインガルテンの意義が大きいことから、脚注内に資料として用いた。

写真36）復元された花壇

写真37）花壇入り口

博物館横にある現在のフレーベルの庭。創設当時よりも丘の中腹あたりに設けられている。

フレーベルによる『母の歌と愛撫の歌』の現代語に印刷された解説付ファイルには、フレーベルの時代の生活様式が描かれている。そのなかには、幼少の子供が栽培されている植物にじょうろで水を注ぐ姿や、鍬を持つ少年の先にも枝のような、或いは鍬のような棒で土に向かう小さな女の子が描かれている。このような姿を見ると、上のような指摘が、歴史的な時代背景とも重なって私達に迫ってくるように感じる。

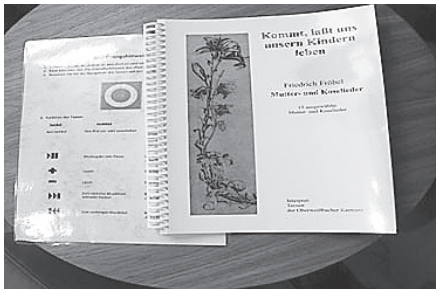

写真38）「母の歌と愛撫の歌」（解説付）

オーバーバイスバッハにあるフレーベルの生家に展示されている「『母の歌と愛撫の歌』解説付」*Kommt, lasst uns unsern Kindern leben Friedrich Fröbel Mutter- und Koselieder,* 15 ausgewählte Mutter- und Koselieder, Interpret: Terzett der Oberweißbacher Kantorei.

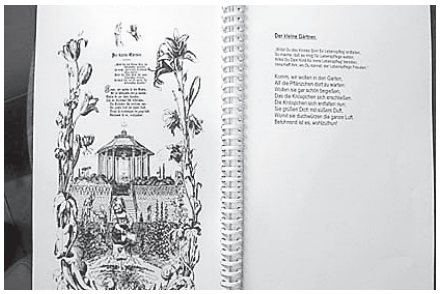

写真39）同書 pp.8-9.（ebd., S.8f.）

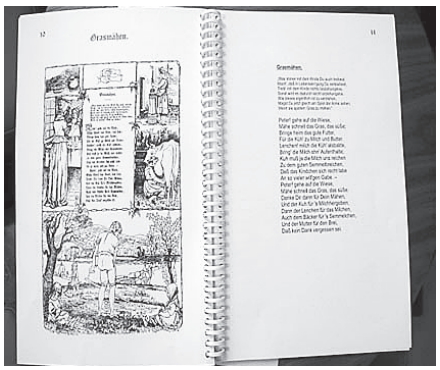

写真40）同書 pp.10-11.（ebd., S.10f.）

フレーベル（1782－1852）の庭に作られた子供達の菜園や花壇、そしてフレーベルの教育活動の原点には、彼に多大なる影響を与えたペスタロッチ（1746－1827）の「労作教育」や同じチューリンゲン州の作業教育家として知られるホイジンガー（1767－1837）の「子供達の極めて活発な活動衝動の利用」（1797年）に共感する教育思想がある。実際、1840年に「幼稚園」に改称される前の施設である「遊びと作業の施設」の前身になる施設の名称が「幼児期及び青少年期の作業衝動を育むための施設」であることも見逃すことはできない。また、ペスタロッチと同時代人である汎愛主義の教育家バゼドー（1723－1790）の重視した自然の学習、体育、手工の学校教育への導入や作業教育の流れも、教育活動に対する時代の潮流と言えるように思われる。

幼稚園創設時にフレーベルが設計した畑に関連し、この時代に端を発し現在でもドイツ各地で見られシュレーバーガルテンと呼ばれる小区画に区分したクラインガルテンを考案して公園設置運動に寄与したドクター・シュレーバー（Daniel Gottlieb Moritz Schreber, 1808-1861）の存在はとても興味深い。彼の発想から発展して体操場や集会場、そして遊び場がクラインガルテンの真ん中に作られ、レクリエーション活動が行われるようになったということである。（同書 p.98）

加えて、歴史的には、森林や耕地の区画化である「地条型耕地」に端を発するのではないかと思われる。

5）デンクマールの各形体は、物質的なものと自然のように生命があり変化するものの表現でもあると言える。例えば、多面体は、古代から地球上の五大元素（正四面体＝火、正八面体＝空気、正六面体＝土、正二十面体＝水、正十二面体＝エーテル）を表していると考えられていた。（ランダ・ランディー著、駒田曜訳『幾何学の不思議―遺跡・芸術・自然に現れたミステリー』創元社、2012年、第１版　第２刷 p.12）

古代の自然論には、現在の化学における分子構造をモデル化した図を想像させるようなところがあるように思われる。

また、球は、古くから調和や完全性の象徴として西洋思想史の中で重要な位置を占めてきた形体である。デンクマールの各形体の話に戻ると、デンクマールの一番下に置かれている四角柱（正六面体）の恩物には、対角線上の二角にそれぞれ小さな三角の面が削られてあり、四角柱の対角線上に棒を貫き差し込むことができるような穴の空いたものがある。その穴に棒を差し込んで正六面体の恩物を回転させると、正八面体の形が浮かび上がり、多面体の理解に繋がる。

デンクマールを構成する３つの形体､｢球｣｢円柱｣｢四角柱｣（正六面体）を２次元の平面に変換すると､｢円｣｢長方形｣｢正四角形｣になるが、上述のように、正六面体を斜めに傾けて回転させることで浮かび上がる正八面体の各面は、正三角形の結合によって成り立っている（８つの正三角形の結合)。そして、正三角形を二十面結合させることによってできる多面体は、正二十面体である。

また、６つの円の半径が交わるように円形に円を重ね並べ、６つの円の外側の円周を直線で結ぶと正十二角形を描くことができる。

このように、デンクマールを構成する３つの形体を２次元及び３次元で捉えると、地球を形成していると考えられた五大元素全ての形体が含まれていることが分かる。

円と正方形についても、円は｢天｣、正方形は｢地｣を表すと考えられ、両者を統一して、四角形に円をはめ込むと面積や周の長さの等しい形を描くことができる（｢円の正方形化｣)。

ここに、天と地の間に存在する五大元素でできた人間の存在を加え、精神と物質の繋がりを象徴的に捉える見方も成り立っていた。（前掲書 p.14）

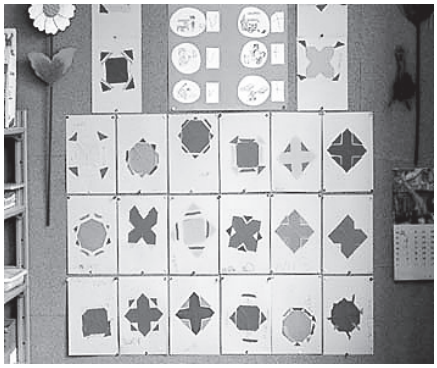

写真41）張り紙の恩物
フレーベル幼稚園の保育室に飾られた様々な幾何学模様の貼り紙。

立体形の話に戻ると、３次元に構成できる正多面体は５つのみであり「プラトンの立体」と言われているが、これについての理解は、プラトンより2000年程早く新石器時代のストーンサークルにも見られると言われている。（前掲書 p.12）正確な日時計や天体観測、土地測量の施設としても用いられていたというピラミッドに隠されている幾何学（geometry「地を測る」）法則（前掲書 p.14、p.18）等の理解が深まると、「地球のことを考えさせてくれる」という指摘が、さらに具体的な理解に導かれる。

６）森での遊びの活動の魅力の一つに､｢五感への刺激の豊かな働きかけ｣の指摘がある。これは、子供達が自然のなかで身体感覚や精神の働きを主体的に用いることで、森がもつ自然の力、場の力を享受しつつ自らを成長させるような森の教育力への着目でもある。（今村光章編著『森のようちえん―自然のなかで子育てを』解放出版社、2012年、第３刷 p.114）

森の中では、準備された活動にも不測の事態の生じる可能性があるため、自らの機転や知恵を働かせることが求められ、子供達の体験活動は、いわゆる「遊び込む」体験へと深められていくという。子供達が「遊び込む」体験によって獲得される「自然との一体感」は、人間が自然との深い関わりのなかで生存していることを

体感させる経験にもつながり、ここにきて「人間の教育」はかえって自己の「動物性を再認識させる教育」になることを気づかせてくれると指摘されている。（同書 pp.157-164）

そしてこれは、「環境保全」や「持続可能な社会」のための教育にとっても、大いに有意義であると考えられている。（同書 pp.168-173）

さらに、子供達の「遊び込む」体験によって獲得される教育効果には、上述の環境教育の観点に加え、次ぎのような指摘もある。

森の幼稚園ではグループで行動するため仲間意識が育つ、また、森という広い空間で自由に動けることで精神がのびのびとし、攻撃性が少なくなる。四季の移り変わりに応じた木々の形や色の変化に感動し、細やかな観察能力も育つ。花が咲き、新芽が吹く春のイースター、実が熟して農作物の収穫が行われる秋の収穫祭などの行事を自然との関係で捉えることができるようになる。花を摘むとはやく枯れてしまうことや、オタマジャクシを水から出すと死んでしまうという体験を通して自然がもつ限界を学び、自然を大切にする心が育つ。子供達は、創造力や空想力、運動能力、観察能力を自由に開花させ、木々を見分け、自然物から道具を発明する。学習意欲や学習能力、自主性において目覚ましい成長を見せている。

それには、「子供達自身の感性や興味で森をじかに体験する」という「自然の直接体験」、「原体験」が大切である。（今泉みね子、アンネッテ・マイザー著『森の幼稚園―シュテルンバルトがくれたすてきなお話』合同出版、2003年 pp.136-141）

（謝辞）

ドイツでのインタビュー調査（４ヵ園）では、意識調査で絵本読み聞かせに助力いただいたHellrung-Tanaka,Ulrike さんの協力を得ることができた。意識調査を含め、ドイツ国内での調査受け入れ園の開拓には少なからずの苦労が伴い、様々な点で配慮を要した。意識調査を含めて本調査が実現の運びとなったのも、ドイツ国内に在住されている方々の尽力によるところが大きい。さらに、調査の趣旨に賛同し、快く調査を受け入れていただいた協力園の先生方の保育活動や子供達への熱意と愛情には、常に心温まる印象を受けた。この場をかりて心より感謝申し上げたい。